

## 論文

## 経済学トライポスの創設とマーシャル

橋 本 昭 一

## 序

科学の制度化という観点から、ケンブリッジにおける経済学の制度化を考察する時、マーシャルの努力による経済学トライポスの創設が最大の出来事であることには誰も反対しない。しかしそこに到る行程を支えた人物を無視することもできない。経済学トライポスの創設を最後の事象として、ケンブリッジにおける経済学の制度化の過程をみれば、大きく分けて5つの画期を認めることができる。

それを一覧表で示すと以下のようなになる。本稿は、この表を説明することを目的としている<sup>\*1)</sup>。

---

\*1) 本稿は、経済学史学会西部部会大会(1989年5月27日、於京都大学)で行われたシンポジウム「20世紀初頭における経済学の制度化」の中でおこなった「マーシャルとケンブリッジにおける経済学の制度化」と題する筆者の発表レジメを拡張したものである。この催しを企画された八木紀一郎(京都大)、井上琢智(関西学院大)両氏に用意された「年表」の作成をふくめ、お礼申し上げる。当日討論に参加して下さった会員諸氏にも、あわせてお礼申し上げるが、ただし本稿は以下に述べる事情をふくめ、各位のご教示を十分組み入れるまでには至っていないことをお断りしておく。

\*2) 巻末の参考文献一覧は、学会当日配付した文献一覧より若干増加しているが、とりわけ、Kadish [1989] については、学会発表後入手したものであり、それにより本稿でも若干の箇所を書き改めたものの、この書を十分に評価の対象とはしていない。ケンブリッジばかりでなく、オックスフォードをも対象にして、本稿の趣旨を拡張した試みを別に用意したいとおもっているのも、その際にこの文献について詳しく考察したい。

## ケンブリッジにおける経済学の制度化の過程

目安となる年	立役者	特徴	keyword
第1段階(1816)	プライム	講義の許可	recognised
第2段階(1848)	ウィーウエル	選択科目化	listed
第3段階(1863)	フォーセット	教授職の公認	established
第4段階(1890)	マーシャル	専門化	professionalisation
第5段階(1903)	マーシャル	学部の独立	liberation
第6段階			institutionalisation

## 1. ジョージ・プライムによる経済学講義の開始

社会学者である富永健一氏によれば、「学問の「制度化」というのは、科学社会学の用語で、学問が大学の講座や研究所のポストなどの制度に組み入れられて、その存続が保証されることをいう。」<sup>1)</sup>これは学問の「制度化」に関する解説である。これは大変分かりやすい「制度化」に関する意味説明の一つである。

ただしここで富永氏の念頭にある学問は、経済学ではなく、「経済社会学」である。富永氏は、法社会学や教育社会学等を「連辞符社会学」と呼び、経済社会学もまた法社会学や教育社会学なみに、各大学の講座名ないし講義題目として取り上げられるとき、経済社会学の「制度化」が成ると見ている<sup>1)</sup>。

この意味で経済学の制度化をケンブリッジに求めるなら、それは1816年ないし1828年ということになる。

ジョージ・プライム (George Pryme, 1781~1868) は1799年にトリニティに入り、1803年に第6位ラングラー(Wrangler)となった。その間およびその後も数

1) 富永健一「経済社会学の学問としての『制度化』をめざして」、経済社会学会『ニューズレター』5, 1989, 1ページ。

多くの賞を得たことより、Prize Pryme とあだ名された<sup>2)</sup>。ロンドンに出て1806年に、弁護士資格をとった。

ラングラーとなった後、ロンドンへ出てインとかテンブルとよばれる学院で研修し弁護士(barrister)になったり、あるいは聖職叙階へ進むというのは、パブリック・スクールの教師になることともに、当時の優秀なケンブリッジ卒業生の歩む典型的な道であった。

健康を害したかれは、1808年にケンブリッジに戻った。1816年かれは、経済学の講義の許可を総長に求めた。ところが当時、経済学の講義は未だ一般的科目とはみなされていなかった。プライムは総長(Vice-Chancellor, 他に Chancellor という職務があるが、19世紀には名誉的な地位でケンブリッジでの滞在も義務づけられておらず、実質的総長は前者であった)に特別許可(*sanction*)を求めて経済学の講義を始めようとしたが、総長の好意にもかかわらず、他のコレッジの長たちは難色を示した。そこで他のコレッジ講義を妨害しないという意味で、12時以前にはこの講義を始めないという条件のもと経済学講義が開始された。ケンブリッジではリカードウの『経済学と課税の原理』の出版の前年に、経済学講義が開設されたことになる。この講義は、当初の予想に反して、多くの熱心な聴講生を集めた。

そして1828年5月27日、評議員会は、プライムを名誉経済学教授とみなす決定をおこなった。ただし、あるいはそれゆえ、それ以後もプライムの経済学講義および試験について、報酬は支払われなかった。かれはまた当時の教授としての生活慣行に反して、ノーフォーク法廷で弁護士活動をつづけ、地域の問題に積極的に関わった。1832年の選挙法の改正後は、下院に議席を持ち、健康を害する1841年までこの議席を保持した。1836年にはオックスブリッジ調査委員会の設置を要求している。

---

2) *DNB* の記述による。以下人物紹介は、特に断りのない限り、*DNB* におおきく依存している。

## 2. モーラル・サイエンス学科の独立と経済学講義

第2位ラングラーであったウィーウエル(William Whewell, 1794~1866)は、後にトリニティのマスターになる人物であるが、1838年にナイトブリッジ教授<sup>3)</sup>に就任した。

1848年、かれの尽力によって、ケンブリッジにおいて、モーラル・サイエンスのトライポスの創設が許可されたが、それとともに経済学はこのトライポスの試験科目の一つに加えられた。この時点で経済学は、単なる自由科目から特定のトライポス受験のための選択科目になったといえよう。なおこの時には同時に自然科学のトライポス制度も許可された。

48年秋に入学した学生が3年次になる、51年より試験が実施されたモーラル・サイエンスのトライポスは、すでにトライポス制度が確立していた2つの学科である数学、古典とは同格のものとはみなされておらず、この2つのトライポスを受験後に受ける科目であった。1860年に他の2つのトライポスと同格のものに昇格した。ここで同格のものとなるという意味は、学生の奨学金、上級学位取得の機会について差別がなくなったということである。

最初の10年間にこのトライポスを受験した者は、合計で66名であった。しかし1860年にはこのトライポスへの志願者は零であった。同格の地位を得たとはいえ、当時は未だ、数学、古典では普通学位の取得さえ危ぶまれる者でも、モーラル・サイエンスなら一寸詰め込み勉強をやるだけで、上級学位をものにすることができるといわれていた。というのもこの学科の関係者が少なく、講義担当者が同時に試験委員を兼ねていたからでもある。したがってこの時期、このトライポスの結果は、フェローシップの対象にはならなかった。

---

3) この教授職は1682年に John Knightbridge の寄贈により、道徳神学ないし決疑論的神学担当教授職として創設された。Peterhouse のマスターとフェローが任免権を持っていた。しかしウィーウエルがこの職に就くまでは実績のない——講義をおこなわない——職〔年収50ポンド〕であった。Winstanley [1940]

なおウィーウエルが1855年までつとめたナイトブリッジ教授職は、ジョン・グロート (John Grote, 1813~66) に継承され、かれが死去するまでこの地位にあった。さらに66年以降はロンドンから移ってきたモーリス (Denison Frederick John Maurice, 1805~1872) が受け継ぐ。マーシャルが大学卒業後所属した「グロート・クラブ」はしたがって、モーリスを主宰とするものであり、実質的にはシジウィックによって運営されていた。シジウィックは1883年にこの教授職に就任する。この教授職は、モラル・サイエンス学科を統括する地位でもあった。

### 3. 経済学教授職の公認とフォーセット

大学が経済学教授職を公式に 認知したのは 1863 年である。教授職の公認とは、その職の恒久化と有給化を意味した。

経済学教授の年俸は 300 ポンドであった。この時も評議員会ではかなりの抵抗があったが、結局98：40で議案は、評議員会を通過した。これに満足したプライムは、即日辞表を提出した。プライムは1868年に死去した。かれは経済学関係の蔵書を、教授に利用してもらうという条件で、ケンブリッジ大学に遺贈した<sup>4)</sup>。

経済学教授職の公募が各パブリック・スクールに公示されると、4人の候補者が名乗り出た。ヘンリー・フォーセット (Henry Fawcett, 1833~1884)、メイヤー (John Eyton Bickersteth Mayor 1825~1910)、コートニー (Leonard Courtney, 1832~1918)、マックラウド (Henry Dunning Macleod, 1821~1902) の4人である。

この4人の経歴を簡単に紹介しておこう。経済学が制度化される以前の状態をよく示しているからである。

フォーセットについては、よく知られているし、婦人参政権運動で名高いミ

4) マーシャルは後にこの蔵書の処置に困り、大学図書館での管理を依頼している。Cf. *CUR*, No. 637 (1886年5月25日号) & No. 652 (1886年10月19日号)。

リセントは、夫人である。セーリスベリーで1833年8月26日に誕生。ケンブリッジのピーターハウスに一年いて、その後1853年よりトリニティ・ホールに移り、1856年第7位ラングラーとして卒業、同じ年のクリスマスにフェローに選出された。それ以前にリンカーン・インで学んでいた。1858年9月に父親の猟銃から発射された散弾により失明したが、それから経済学を学び始めた。1859年のブリテッシュ・アソシエーションのアバディーン大会で朗読(?)、喝采を浴びた。1861年経済学クラブの会員となり、63年には *Manual of Political Economy* を出版、好評をかくしていた。

メイヤーは基本的に古典学者であり、その語学力・読書量・博識は有名であった。著述も多い。ミルトンの作品はラテン語でも英語でもほぼ完全に暗唱できるほどであったという。1844年、ケンブリッジのセント・ジョーンズに入り、のちのマスター、ベートソン(William Henry Bateson, 1812~81)等に師事、1848年古典のトライボス第3位(*the third classic*)。兄は1842年に第3位ラングラー、弟は1851年に古典第2位。1849年3月に、メイヤーはセント・ジョーンズのフェローに選出された。しかも他の二人も相次いで、フェローに選出された。前代未聞のことであった。しばらくマールバラ・コレッジの教師を勤めたあと、1853年以後ケンブリッジ在住。55年には聖職叙階。経済学教授職の選考に敗れた翌年の1864年には、無競争で大学図書館長、1872年にはラテン語教授、1902年にはベイトソン→ジェップの後を継いで、セント・ジョーンズのマスターに選ばれている。

マクラウドはエディンバラ・アカデミーからイートンへ進学。1839年トリニティ・コレッジに入り、1843年 senior optime, 1863年 M.A.学位を取得後、インナー・テンプルに入っている。多くの銀行論関係の著述があり、価値論では効用説・生産費説を退け、ウェートリィに倣って、価値=交換可能性説をとる。1858年、*Elements of Political Economy* を出し、その後何度も改定・改題し、版を重ねた。

マーシャルも1895年公刊の『経済学原理』第3版以降の版では、このことに

触れ、マクラウドは「1870年以前に書いたもの」（上述の著書を指す）の中で「古典派の価値と生産費の関係の学説に対する近年の批判に対して、形式、内容双方において先行するものを持っていた」<sup>5)</sup>と述べ、敬意を示している。

「グreshamの法則」を唱え、この言葉を一般化させたのは、かれである。しかし1863年ケンブリッジ教授職の就任競争に負け、つづけて1871年にはエディンバラでも失敗、さらに1888年のオックスフォードにおける教授職選考でも失敗した。コーツはかれを、‘would be professor’と呼んでいる<sup>6)</sup>。

コートニィは、ケンブリッジのセント・ジョーンズ出身、1855年に第2位ラングラーとなり、フェローに選出される。リンカーン・インに入る。教授就任選考にやぶれた後、ジャーナリストとして活躍。タイムズのコラムには16年間で3,000本以上の論文を執筆した。1872～75年、ロンドンのユニヴァシティ・コレッジの経済学教授。その後政界に入り、フォーセットとともに、自由党左派グループとして活躍。1880年内務次官（第2次グラッドストーン内閣）、つづいて植民省次官、1882年大蔵大臣、1892年、下院議長。1906年には貴族となり上院入り。反帝国主義者、反戦主義者として活躍。

以上4人についての選考は、ケンブリッジ在住の評議員の投票にかけられた。その結果、盲目のトリニティのフェロー、フォーセットが90票を得て選出された。メイヤー80票、コートニィ19票、マクラウド14票であった。

メイヤーのように「経済学者」でない者が、高い支持を得ている事実は、当時のケンブリッジでは未だ経済学の公認のディシプリンがなかったこと、またかなり容易にいかなる分野からも接近できる学問とみなされていたことを意味する。同時に低い票しかえられなかった他の候補のその後の活動領域を見ても、経済学は専門の研究者によってのみ研究される領域とはみなされていなかったことが分かる。そのなかでもっとも今日の意味で経済学者に近いマクラウドの支持が低いのは、かれの激情的な文体（他人の批判）がその原因であるといわれ

5) Marshall [1961], I, p. 821.

6) Coats [1967], p. 726.

ている。マローニーは、かれについて、「つきることのない毒舌を連射した」<sup>7)</sup>などと述べている。

1863年にともかく経済学教授職が永続的な地位と所得を保証された事実は、公認 established という用語で確認されている。したがって公認が、制度化の判断基準となっている。単にある学問が講義科目として、大学に常設されるという富永流の「制度化」では、不十分で、他の教授職と対等のかたちで経済学教授職に給料が支払われるというのを、establish ととらえるとき、経済学の「制度化」は、講義の常設の開講ではなく、日本の大学という講座の創設がメルクマールとなる。この観点からすれば、フォーセットの代になって、1863年に、ケンブリッジでは経済学が制度化されたといえる。

フォーセットがこの職に就いたころは、未だモーラル・サイエンス学科は人気のある学科ではなく、上に述べたように1860年には受験者ゼロというありさまであった。しかしシジウィックなどの努力とあいまって、さらにマーシャルが1868年にコレッジ・レクチュアラーになる頃より、上昇気運に恵まれることになる。そのさい当時の若者たちに与えた進化論の影響も見逃すことはできない。1870年代にはこのトライポスで優秀な成績を収め、ケンブリッジにフェローとして残る者が増加した。すなわち1870年にはフォックスウエル (H. S. Foxwell, 1849~1936, 1881年, ロンドン・ユニヴァシティ・コレッジ教授)が、つづいて1872年にはカニングガム William Cunningham (1849~1919, 1891年, ロンドン・キングズ・コレッジのツーク教授)とメイトランド (Frederic William Maitland 1850~1906)がともに第1位にランクされた。つづいて1872年には、ウオード (James Ward, 1843~1925, 1881年にトリニティのレクチュアラー, 1897年には精神哲学および論理学教授に就任), 1873年には、カニングガム (Henry Cunyninghame), 1875年, ケインズ (John Neville Keynes, 1852~1949), 1876年, ニコルソン (Joseph Shield Nicholson, 1850~1927), さらにスクラットン (Thomas Edward Scrutton, 1856~

---

7) Maloney [1985], p. 120.



1934) があいついで第1位合格者であった。

これらによりモラル・サイエンスの、したがって経済学の信用も少しは高まった。

その頃には、各コレッジもレクチャラーを任命するようになった。シジウィック、メイヤー、ヴェン、レーヴィン、マーシャルなどがその陣容であった。さらに1873年には、経済学は歴史学トライポスの選択科目にもなった。

#### 4. マーシャルの経済学教授就任

新しいケインズ伝の著者スキデルスキーは、「マーシャルは、イギリスにおけるアカデミックな経済学(academic economics)の真の創設者であった」<sup>8)</sup>と述べている。マーシャル自身は、スミスが modern economics の創設者であると述べているが<sup>9)</sup>、スキデルスキーによれば、スミスから J. S. ミルにいたる古典派の系譜を代表する人物は、その中に大学教授や経済学担当教授が含まれていたとしても、未だ、academic economics ではなかったということになる。

この場合 academic という言葉は、大学の中で、古典や数学と並ぶ、それと同格の学問という意味あいをもっていると解してもよいだろう。

それでは古典や数学と同格の学問となる条件はなんであろうか。多分それは大学の3年ないし4年間をその学問の研究に専念して学位(BA)が獲得できるというものである。それはケンブリッジでは、入学枠、奨学金、フェローシップ等と結びつくものであった。academic の意味は、もちろん他のかたちでも解釈することができる。政策的価値判断に直ちに組しない客観的事実判断に専念できる研究上の方法論が確立された学問に、経済学を仕立てあげることにマーシャルが努力したのも事実である。

ここで参考になるのは、科学革命にかんする議論であろう。ニュートンをも

---

8) Skidelsky [1983], p. 40.

9) Marshall [1961], I, p. 725.

って近代科学の祖とする立場は、科学研究が、神学や宗教からの影響を脱することになった方法上のパラダイム化を強く意識している。観察・実験・分類を土台にして原理・法則を打ち立てることをもって科学の役割とした時、18世紀の科学は、それ自身でディシプリンを確立、一個の専門的学問となった。マーシャルが求めたものもそれであった。

スキデルスキーが academic の言葉で意味したものを特定化するのは難しいが、上に述べた第1の意味あい以外のニュアンス、特に科学革命でもって意味した内容が含まれているのは確かである。

マーシャルがケンブリッジにおいて経済学教授に選任されたのは、1884年12月13日である。年俸は、セント・ジョーンズのフェローにともなう収入と合算して700ポンドであった<sup>10)</sup>。対立候補は、Inglis Palgrave, W. Cunningham, MacLeod(!), T. W. Levin, R. E. Hooppell (1855年, 第40位ラングラー, 56年, 第1級モラル・サイエンス合格) であった<sup>11)</sup>。

その時点では、しかしながら、経済学は先に制度化されたモラル・サイエンスを構成する科目群の中の一選択科目にすぎなかった。したがってマーシャルは学科 Board としては、モラル・サイエンス学科に所属する教授であった。〔この時点(1882年)ではモラル・サイエンス学科には3つの教授職があった。すなわちナイトブリッジ教授職、経済学教授職、そして精神哲学および論理学教授職である。〕

翌1885年2月24日にマーシャルは、教授就任講演をおこなったが、『アカデミー』誌3月28日号は、マーシャルと前任者を比較して、フォーセットは政治家としての行動と特異な環境によって記憶されるだろうが、マーシャルは新しい学派の頭領であることをみずから宣言したと述べている。しかしかれが経済学科の独立に成功するまでに20年近い年月がかかった<sup>12)</sup>。

10) *CUR* [1884], No. 557. 橋本 [1984a] 参照。

11) Groenewegen [1988], p. 633.

12) 橋本 [1984a], 西岡 [1988] 参照。

マーシャルは経済学を教養主義を重視する大学の中で、学ぶ価値ある学問であるという信念を持っていた。経済学の課題を、マーシャルのような人間観・労働観のもとで定めてゆくならば、若い青年とりわけ社会の各界で指導者となってゆくオックスブリッジの学生が、その教養の一部として経済学を身につける必要性は充分にあるという自負のもと、ケンブリッジ大学当局にこの学問のための新しいトライボスを設けることを、マーシャルは要求してゆく。ただし、かれが具体的にそれを要求する20世紀初頭のケンブリッジ大学はある意味において、きわめて民主化された組織体になっていた。新しい制度改革は、まず請願書を専門評議員会(Council of Senate)に提出するという手続きから開始され、M.A. 記をもつすべての卒業生(M. A. 記は、B. A.記を持ち25歳になれば、ほぼ自動的に取得可能である。)が評議員資格をもっていたが、通常はケンブリッジ大学でなんらかの業務を担当し、ケンブリッジの町に居住しているリージェントと呼ばれる人々の自由な参加のもとでの公開討論会を経て、重要案件すなわちリージェントの一人でも反対すれば、特別委員会が組織され、報告書が作成・公開され、それについての公開討論会が公示され、発言希望者がおおければその期間が二日以上にわたり、最後には評議員全員が有権者である投票に諮られることになる。一つのトライボスの創設請願といった問題は、慎重な準備と説得を必要とする事柄であった。

マーシャルは経済学教授の職務に就くや否や、経済学がケンブリッジで市民権を得るための準備を始めたといっても過言ではない。かれは就任早々の告示で、ケンブリッジ大学で専門に経済学を学ぶ余裕のない者の自宅訪問を歓迎する旨を告げるとともに、翌年には経済学賞を設ける許可を大学当局にもとめている。しかもこの経済学賞は、モラル・サイエンスでトライボスをねらっている学生ではなく、数学や歴史や哲学を学ぶ学生を強く意識したものであった。

かれは多くの有能な弟子を育てる一方で、『原理』の刊行と同じ年に英国経済学会の創設とその機関紙 *Economic Journal* の発刊に関与し、また多くの王

立委員会の委員を歴任し、イギリスの経済政策に影響力を行使するとともに、多くの時事問題については、かれが論争嫌いだとは思えない位、しばしば *Times* に投書し、それが反論を呼べば丁寧に応答した<sup>13)</sup>。そしてすでに19世紀が終わる前に、「イギリスの大学で経済学を講じる者の半分がマーシャルの弟子である」<sup>14)</sup>といわれるほどになっていた。これは科学社会学の言葉でいえば、マーシャル経済学のパラダイムが、Invisible Collegeを形成していたといえる。

これらのことを念頭においてであろうか、ハチソンは、「ケンブリッジ学派は、マーシャルが1885年に教授職に就いた時に姿を現したと言っていいだろう」<sup>15)</sup>と述べている。かれが特に強調するのは、20世紀の前半において、ケンブリッジ学派はイギリスの経済学においてほとんど独占的ともいえる地位を占めていたこととともに、freshman から emeritus にいたるまで、の全生涯を経済学の研究者として過ごすことが稀ではなくなったからである。

フォックスウエル、J. N. ケインズは、マーシャルのケンブリッジのレクチャーラー時代の弟子である。J. M. ケインズは、かれの最後の弟子である。かれは多くの弟子を育てたが、プリストルやオックスフォード時代は別にして、ケンブリッジでの弟子の多くは、ピグーを除くと、かれの性格や方法論に強く反発する人物が多かった。かれが経済学のトライポスを創設するさいに、最もするどい反対は歴史学科のカニンガムとマックタガートから出ていたが、かれら兩人もまたマーシャルの弟子であった。

## 5. 経済学トライポスの独立

スキデルスキーは、シジウィックとマーシャルを対比し、マーシャルが社会科学の中では経済学だけが堅固 hard な原理 principle を有しているという確信を持っていた点で、シジウィックとまったく違う性格の持主であったこと

13) 橋本 [1986] 参照。

14) Foxwell [1888], p. 92.

15) Hutchison [1981], p. 46.

を強調している。ここでいう原理とは、心理的動機（努力と犠牲）の計測手段としての価格ないし貨幣である<sup>16)</sup>。

したがってスキデルスキー的に解釈すれば、(1)その学問（＝科目）が大学に常設されるようになっただけでは不十分であり、また(2)その科目のみを専門に担当する教授職が創設されただけでも未だ充分とはいえず、(3)学生がその科目を大学に在学中に専門の研究対象として学位を取得できる条件がそろふ必要がある。そのためには、固有のディスプリンが確立されなければならない。言葉を代えれば、パラダイムの確立とその学問のクーンの意味における通常科学化が必要である。

この意味で「制度化」という用語を用いるなら、ケンブリッジにおける経済学の制度化は、1903年ということになる。しかし日本の大学にも完成年度という言葉があるように、1903年に経済学のトライボスが誕生したとしても、この時点では未だ日本的な意味での経済学専攻学生は一人もいないということに留意しなければならない。マーシャルが最も苦勞したのは、このトライボスにケンブリッジの中でも優秀な学生が挑戦してくれることであった。すなわちケンブリッジにおいては経済学科が独立したとしても、経済学科の定員といったものは存在しないので、経済学トライボスの受験者が限りなく零に近いということとは充分起こりえることであった。

マーシャルは教授に選任されると、間を置かず、1884年の暮れにシジウィックを訪れているが、その時すでにシジウィックの優柔不断と過剰規制を批判し、シジウィックの講義にはあまり学生が出席していないことを、オックスフォードのグリーンとの講義と比較して、かれがケンブリッジではシジウィックとは違う方針で臨むことを宣言している<sup>17)</sup>。

当時のケンブリッジでは経済学は、モラル・サイエンスと歴史学（1854年創設）のトライボスを目指す学生にとっての選択科目という位置づけしかもっ

16) SKidelsky [1983], p. 43.

17) Groenewegen [1988], p. 637 n. 17.

ていなかった。モーラル・サイエンスの方は1860年の改革(この時から上級学位の認定が始まる)で哲学(moral philosophy)と論理学が倫理学とともに中心科目であり、歴史(近代史)、政治哲学、法理学および経済学が選択科目となった。さらに1867年の改革で法学と歴史学のトライポスの独立を踏まえて、これらの科目が除外され、モーラル・サイエンスの中心は精神科学と論理学となった。

そして1889年には、シジウィックから大きな譲歩をかちとり、モーラル・サイエンスのパートⅡでは、経済学を必修科目に格上げし、他の2教科からの1科目選択と組み合わせるのに成功している。それにもかかわらず、1900年にシジウィックが死去することにより、かれの経済学の独立運動は一時中断せざるを得なかった。しかし翌1901年には、「大学において経済学と政治学の学習を強化する方策」を検討する委員として活動を再開した。メンバーはピーターハウスのマスター、ウオード、シジウィックの後継者(当時空席)、政治学講師デッキンソン(Lowes Dickinson)とマーシャルであった。この時点ではマーシャルは、経済学の完全な独立ではなく、物理学・生物学委員会に包摂されていた自然科学学科のように、歴史学トライポスと併置された大委員会(大学科制)を妥協策として考慮していた。

そしてマーシャルは、1902年4月に本文17ページの請願書<sup>18)</sup>を評議員会に提出した。さらに通常は専門評議員会の好意的判断を待って組織される特別調査委員会が行う仕事の一部をも私案としてつけている。かれは経済学トライポスのための問題群を「ケンブリッジ大学における過去10年間ににおける多くの討論と合衆国および大陸諸国における最近の経済学教育の展開についての検討」に基づいて参考資料として作成している。

この請願書でマーシャルは、日本流に言えば、ケンブリッジ大学に経済学部のコースを新設することを要望している。1902年当時のモーラル・サイエンスのトライポス・パートⅠは主として個人的(非社会的)問題と関連した心理学、論理学および論理学に関する5つのペーパー(小論文)と2つの経済学に関する

---

18) Marshall [1902].

ペーパーからなっているが、その結果3年間のケンブリッジ滞在中に経済学を学ぶのを非常に難しくしていた。抽象的思弁に2年間で習熟することが難しい上に、それらの学習が経済学にとってかならずしも良き準備とならないからである。他方歴史学の方はかなり経済学に好意的であったため、現行制度のもとでは2年次の終わりには、歴史学のトライポスを受験し、3年次の終わりには、主として上級経済学と政治哲学とからなるモーラル・サイエンスのパートⅡに進むのが、経済学を主に学ぼうとする学生にとっては望ましい道となった。ところが歴史学のトライポス・パートⅠは中世史が中心であった。

このような背景のもと、マーシャルは経済学中心のトライポスの創設を痛感していたのである。とくに1900年にはロンドンで政治経済学部が、バーミンガムで商業学部が設置され、またマンチェスターでも経済・政治学部創設が承認され、オックスフォードでも同様の気運が見られるという事情のもと、マーシャルは具体的行動を開始した。

かれは現在のイギリスで経済学を学ぶ必要性が高まっていることを次のように説明する。

①イギリスが19世紀前半までは世界の経済をリードし、今日でもイギリスの18、19世紀の経済史研究は世界各国で大きな関心を集めている。ところが19世紀後半以来イギリスはその経済学的研究においてさえ、アメリカ人やドイツ人の業績に頼らざるを得なくなっている。それだけ経済学研究に後発国が熱心である一方でイギリス側の対応が遅れている。

②行政、法制、外交の仕事が、経済問題と密接に結びついてきている。とりわけ国際関係の急速な展開は、新しい問題の解決を古い理論の中に求めるのを不可能にしている。イギリスの高い文化水準と余裕のある生活水準を維持するためには、他の国に負けない経済的生産性を保持する必要がある。活力の2大源泉は「より良き食生活とより良き教育」であるが、西ヨーロッパの諸国もその2つのものを得て経済力をつけてきているのに対し、イギリスの労働者の大部分はすでにかなり恵まれた食生活を享受している一方で、労働意欲は衰えつ

つある。またイギリスの教育の改善は遅れており、肉体的活力も他の諸国とその差が縮まりつつある。鉄鋼業においては最早イギリスは世界の覇者とはいえないし、手工業の技能の面でもはるかに遅れていた国に追い抜かれつつある。イギリスの(土地を除いた)国富を、年々の総生産の10倍と見積もるならば、近隣国の生産性が、われわれのそれを少し凌ぐだけでも、たちまちにして追い抜かれてゆくであろう。とくにドイツとの競争に敗れるならば、イギリスの政治的安定を脅かされることになる。

さらに③経済学の研究は生活の質との関連で一層緊急のものになっている。有利に利用できる経済的・社会的諸力が、今日ほど強力であったことはかつてないが、それがどのような結果を生み出すかがこれほど不確定であったこともない。労働者階級が政治的な力量をつけて産業の規制に影響を与え始めたが、これがうまく作用すれば良し、悪くすれば大きな弊害をもたらす。そこで科学的精神で労働者問題に取り組み、正しい社会改革を志す学徒が要求されることになる。

「国民の能率が、各経済団体の構成員間の統一を保つ信頼や愛情によってどのような影響を受け、またそれらにどのような影響を与えるかを観察する必要がある。個々人の利他心と専門職の礼儀や労働組合の慣行の階級的利己心のなかに混ざり合っている善きものと悪しきものを分析する必要がある。増大する富と機会が現世代と次の世代の真の福祉のためにうまく利用しうるかを研究する必要がある。」

以上三つの説得理由は、国家にとって経済学研究が重要な課題となっていることを主張するものであるが、かれはつづけてケンブリッジ大学のような古典大学において、経済学を学ぶ学生を養成する必要もまた緊急なものであるという。多くの労働者を雇用する実業家は、一般民衆の生活実態を弁えておく必要がある。かれは、利潤を揚げる者として優れた能力を持っている者が、同時に良き市民であることの重要性を強調する。同じことは公務員になる者も、聖職者になる者にも、また地主である者にも言える。自分とは境遇の違う人々の生



活問題がいかなるものであるかを弁えずして、良き市民にはなりえない。階層の異なる人々の望みや理想を察知する柔軟性は、経済学を学習を通じてえられるであろう。人間生活の質に及ぼす経済問題の影響力が高まっており、全寮制大学といえどそのような方面の教育を無視することはできない。そしてまたそのような学生に相応しい資質を養成するのに経済学は大いに役立つ、とマーシャルは述べる。

マーシャルは社会の指導者となる者が労働者階級の窮状を知り、かれらを「紳士階級」として受け入れてゆく準備をする義務があると考えていたのである。かれにとっては人格向上にプラスとなる職務に就ける人々が紳士階級であった<sup>19)</sup>。そして国際的にはイギリスが近隣諸国より経済的に優位を占める位置を保持することが、イギリスと世界の平和のために必要であった。『原理』の段階では、未だ明示的に示されていなかった、この考えは、しかし第1次世界大戦の勃発によって証明されることになった。

かくしてケンブリッジ大学で経済学が市民権を要求する以上、その経済学が決して実学的なものではなく、紳士階級にとって学ぶ価値のある格をもったものでなければならなかった。人格の向上を「貧困の解放」の最終目的としたかれの経済学はまさに、その資格を持つものであった。

評議員会は、この多数の有名人が署名した請願を受け、1902年5月22日に特別委員会を任命し、1901年の委員会は大幅に拡充されることになり、14名が委員となった。そこにはカニンガム、マックタガート、またフォクスウエルもJ. N. ケインズもメンバーであった。

1903年3月4日に最終報告書を提出、新しいトライボスの創設を提言した。歴史学科を代表していたカニンガム、マックタガートは署名しなかった<sup>20)</sup>。5月7日の討論会では、カニンガムは経済学研究のための歴史学研究の必要性を強調し、マックタガートは、ケンブリッジにおける経済学の専任スタッフの少

19) Marshall [1873], p. 104.

20) CUR [1903] (March 10), p. 538. そこにはマーシャルを含む11名の署名がある。

なさを問題にした<sup>21)</sup>。1903年といえば、物理学の領域では、マリー・ピエール・キュリーがベクレルとともにノーベル物理学賞を受賞した年である。ウラン、トリウム、ポロニウム、ラジウムの発見にたいして与えられたものである。エックス線とは異なり、みずから放射能を発する物質が発見されたのである。そして物理学の最先端では、すでにこの年、原子は分割不可能な不変な要素ではないことが明らかにされていた。物質は決して客観的な実在ではないかもしれないという物理学上の発見に不安を感じたレーニンが唯物論と矛盾しない物理学の発展を望む見解を示したのは1909年のことであった。

古典物理学がその存在根拠を極限されつつあった時、マーシャルはむしろ古典物理学の地位へ経済学を押し上げようとすることに最終的に成功したのである。ちなみに、1904年のノーベル物理学賞は、マーシャルと同じ年にシニア・ラングラーであったレーリー卿（John William Strutt, third Baron Rayleigh 1842～1919, トリニティ出身）が受賞、さらに化学賞のほうは、レーリーとの共同研究者であり、ブリストルでは、マーシャルの後任の校長職を引き受けたラムゼーが受賞した。二人の受賞をマーシャルがどう受け止めたかは分からないが、かれらが物理学や化学の領域であげた業績を、かれが経済学において目指していたことは確かである。

しかし新しいトライポスの出発は順風満帆であったわけではない。経済学の実質的制度化は、これ以後のマーシャルがほぼただ一人で努力しなければならなかった。

マーシャルは1906年5月、すなわち第1回の、経済学トライボス・パートⅡが実施される数カ月前に『経済学トライボス案内』<sup>22)</sup> という小冊子を発行している。16ページの薄い冊子であるが、トライボス創設過程を回顧するような内容も含まれている。そこではまず新しいカリキュラムの目的が述べられている。

21) *CUR* [1903] (May 14), p. 766～68.

22) Marshall [1906].

かれは、(1)リベラル・エデュケーションとしての経済学を目的の第1に挙げている。かれはリベラル・エデュケーションを、「知性を磨き、柔軟な精神的能力を生み、人間の品性を高め、かくして単に専門家を育てるだけではなく、有能な人間を育てるもの」とする当時のセント・ジョーンズ・コレッジのマスター、ジェップの言葉を引用しつつ、経済学(ならびにそれに関連した政治科学)のカリキュラムが、それを実現するために組み立てられていることを強調する。そのためには、観察力、理解力、推論力の3つの能力を養わなければならないが、経済学の学習には、生活・労働条件を綿密に観察することが求められるし、また身のまわりの生産や交易の過程を注意深く観察することが求められる。学生の理解力は遠く離れた、あるいは表層下にある因果関係をおさえようと絶えず駆使される。さらに、推論の力量もほとんどすべての他の学問より強く求められる。この点では経済学の学習は数学、物理学に優るとも劣らないと、マーシャルは述べる<sup>23)</sup>。

経済学研究の専門化の第2の目的は、1903年にも述べているように、専門の経済学研究者の養成である。これまでは、最も経済が進んだ国としてイギリスは他国の事情から学ぶ必要がなかったが、今日では多くのことを他の北ヨーロッパ諸国から学ばねばならない。そのためにはどうしてもカリキュラムを拡充する必要があるとマーシャルは言う。そして第3の目的は、実業や公務に携わるようになる若者の訓練である。これらの目的を実現するために、広い範囲の経済学の基礎を学ぶために、2年間をパートIのために、さらに各個別の関心を深めるためにパートIIが必要である。それらを踏まえて、マーシャルは経済学トライボスの概要を紹介する。

それによるとパートIは、与えられたテーマによるエッセイが一つ(一つのペーパーは3時間で作成される)、イギリスの憲政にかんする論文が一つ、18世紀以降の経済史および歴史一般に関する論文が2つ、経済原論関係の論文が3つからなる。パートIIは、エッセイが一つ、経済学の一般理論が3つ、以上が必

23) Marshall [1906], pp. 6~7.

修で、他に、応用経済学(実証)が2つ、応用経済学(理論)が2つ、近代政治理論が1つ、現存の政治状況との関わりでの国際法が1つ、経済問題に適用された法原理が2つ、特殊問題が1つで、全体として6～8間を選択することになる。

今日のケンブリッジのトライポスも、社会学的な側面が加わったことを除けば、基本的にはマーシャルの構想通りのペーパーを課しているし、現在でも他の部門のパートIを修得後、経済学のパートIIに進めるようになっている。

1903年にトライポスが導入され、1905年に最初のパートIが、翌1906年に最初のパートIIが実施されたが、ここでもかつてのモラル・サイエンスが味わった悲哀が繰り返される。優秀な学生はただちには、このトライポスへ接近してこないのである。

経済学トライポスの受験者の推移は、1905年10名(Part Iのみ)、1906年、8名(Part I、男性4名、女性1名、II、男2、女1名)、1907年、13名(Part I、男6、女2名、II、男4、女1名)、かれが引退する年である1908年には17名(Part I、男7、女1名、II、男5、女4名)、翌1909年は、少し増えて23名(11名と13名)であった。1910年では総計29名、マーシャルが死去する1924年には71名である<sup>24)</sup>。

ケンブリッジ学派は、これによれば着実に増加しているのは事実であるが、引退までの数字は、マーシャルが一年間オックスフォードで教えた数よりもずくなかった。したがってまた育て上げた研究者の数も微々たるものであった。そうではあっても、1891年から1900年の10年間で、モラル・サイエンスのPart IIを受験した学生の合計が60名(内女性12名)であることを、斟酌すれば、マーシャルの努力はそれなりに報われているといえることができる。

## 6. 経済学の制度化

1905年に数学のトライポスを受験したものの、予想に反して優秀な成績を挙げることができず、そのままケンブリッジでの滞在を一年延長した J. M. ケイ

24) Kadish [1989], pp. 177, 216.

ンズにたいして、マーシャルは経済学パートⅡの受験を猛烈にはたらきかける。もともと優秀なレポートを作成する技量をもっていたケインズなら、わずかな時間をかけるだけで、第1位合格は間違いないといった甘言を、マーシャルは弄している。このことは、マーシャルにとって不本意ではあるが、優秀な学生たちにとって、経済学はなお3、4年間集中的に学習する専門的な学問とはなっていなかったことを物語っている。

息子メイナードの進路について、父の J. N. ケインズはアンビバレントな状況に置かれた。かれはこの時点ではマーシャルに対する協力心も、経済学に対する熱意も失っていた。経済学の方法論においても、人間的にもマーシャルに対し嫌悪感を持ち始めていたからである<sup>25)</sup>。したがってメイナードがマーシャルのもとで経済学者として働くことを歓迎する気にはなれなかった<sup>26)</sup>。それにもかかわらず、ケインズがフェローの地位を得て、ケンブリッジに留まることを熱望していたのである。

ここで、制度化について、第4の意味を検討しなければならない。経済学の分野では、佐和隆光氏がこの意味での経済学の制度化を批判的に取り上げている。

佐和氏は広重徹の方法に従って、「社会的に容認された組織体になること」を学問、経済学の制度化をとらえ、その中身を、教科書化(古典は読まない)、レフェリー論文化(著書は業績にはならない)、モデル学化(反歴史主義)、職業化(ジャーゴンが一般人を排除する)、ととらえ、近代経済学は、1950～60年代にアメリカでこの意味で制度化されたととらえている<sup>27)</sup>。

この意味での制度化は、現在もケンブリッジは賢明にも避けているように思えるが、この時点ではいくつもの懸案事項が残され、マーシャルの双肩にかかっていた。

25) Maloney [1985], p. 64. Skidelsky [1983], p. 58.

26) Skidelsky [1983], p. 185.

27) 佐和隆光[1982], 7, 134ページ。

たしかに1903年にケンブリッジでの経済学研究は、学生時代の3年間をフルに利用できるものにはなった。しかし新設学部の弱みもあり、すぐには優秀な学生はやってこなかった。優秀な学生の多くは、他の学問領域を専攻することで奨学金を貰っているわけであるから、ケンブリッジのような大学で、ある学問が権威を持つためには、それが奨学金・フェロー職とつながっている必要があった。それがまた経済学の制度化の最後の条件ともなった。

1903年時点では、教授以外には、経済学担当の選任レクチュアラーの定員はゼロであった。モーラル・サイエンスのレクチュアラーとしてひきつづきフォックスウエルやケインズの協力は得られたが、フォックスウエルは半ば以上ロンドンの方に目を向けており、マーシャルへの協力の意欲は失っていた。マーシャルはポケットマネーで私的なレクチュアラーの地位を用意していた。さらにガードラー社(Worshipful Company of Girdlers)が資金を提供してくれたので、ガードラー講師職ができ、すでに前年ロンドンのジェヴォンズ講師職に就いていたピグーを呼び戻した。最初の大学設置の講師職は1911年になってやっと一つ用意された。第2のものは、第1次大戦後の1923年であり、マーシャルが死去する1年前のことであった<sup>28)</sup>。

マーシャルは執筆に専念したいという理由で、1908年に教授職を退いた。後任にはピグーが選ばれた。そこでガードラー講師には、Meredith, J. M. Keynes, Lavinton と継承されていった。もっともケインズがインド省からケンブリッジに戻ってきた時のレクチュアラー職は、マーシャルが私的に用意したものであり、この形式はピグーの代になっても続けられる。

ピグーは名門ハロー・スクールを首席で卒業、ケンブリッジのキングズ・コレッジに進学した。1899年、歴史学のトライポスで第1位、さらに翌1900年マーシャルの薦めでモーラル・サイエンスのトライポス、パートⅡを受験、これも第1位の成績であった。キングズにはフェロー候補が多数待機していたこともあり、1901年「最近50年間におけるイギリスの農産物の相対価値の変化の原

28) Groenewegen [1988], p. 648.

因と影響」という論文を執筆し、フェローになった。1903年には後に拡充されて『産業平和の原理と方法』（1905）と題する著書となる論文を書き、マーシャルが出資して創設したアダム・スミス賞に応募し、受賞した。この論文は、当時のイギリスにおいて大きな社会問題になっていた失業問題と労使関係を扱ったものであるが、早くもかれの生涯の課題となった厚生経済学の諸原理が考察されている。1903年のガードラー講師職の創設とともに翌年ケンブリッジにもどったかれは終生独身のままキングズに留まり、学生と登山を楽しむ他は服装などには無頓着で研究一途の生涯をおくった。

#### 文 献

- 1) Anonymous [1942], The Centenary of the Birth of Alfred Marshall July 26, 1842—July 13, 1942, *Economic Journal*, Vol. 52.
- 2) *Cambridge University Reporter (CUR)* [1885~1903].
- 3) Clark, J. W. (ed.) [1904], *Endowments of the University of Cambridge*, Cambridge University Press).
- 4) Coats, A. W. [1967], Sociological Aspects of British Economic Thought (CA. 1880~1930), *JPE*, Vol 75.
- 5) Foxwell, H. S. [1887], The Economic Movement in England, *QJE*, Vol. II.
- 6) Groenewegen, Peter D. [1988], Alfred Marshall and the establishment of the Cambridge Economic Tripos, *HOPE*, Vol. 20, No. 4.
- 7) 橋本昭一 [1984a], 「A. マーシャルのケンブリッジへの帰帰—1861~1885年のマーシャル」, 『経済論集』, 第33巻第3号.
- 8) ——— [1984b], 「ケンブリッジにおける 経済学賞の創設」, 『経済論集』, 第34巻第1号.
- 9) ——— [1986], 「マーシャル経済学の倫理的 성격」, 『南山社会倫理研究所論集』, 第2号.
- 10) Hutchison, T. W. [1981], *The Politics and Philosophy of Economics*, Oxford (Basil Blackwell).
- 11) Kadish, Alon [1989], *Historians, Economists, and Economic History*, London and New York (Routledge).
- 12) クーン, トーマス [1976(1971)], 中山茂訳『科学革命の構造』, みすず書房, [1962, 1970].
- 13) Maloney, John [1985], *Marshall, Orthodoxy & the Professionalisation of Eco-*

- nomics*, Cambridge (Cambridge University Press).
- 14) Marshall[1873], *The Future of the Working Classes*, in Pigou (ed.) [1925], *Memorials of Alfred Marshall*, London(Macmillan Co.)
  - 15) ——— [1902], *A Plea for the Creation of a Curriculum in Economics and associated Branches of Political Science*, Cambridge.
  - 16) ——— [1903], *Selections from letters recommending an Economics Tripos* (To the Members of the Senate).
  - 17) ——— [1903], *The New Cambridge Curriculum in Economics and associated branches of Political Science; Its purpose and plan*, London (Macmillan and Co, Ltd.
  - 18) ——— [1906] *Introduction to the tripos in Economics and associated branches of Political Science*, Cambridge (University Press).
  - 19) ——— [1961(1890)], *Principles of Economics*, 9<sup>th</sup> ed. 2vols., London (Macmillan and Company Ltd.) [1<sup>st</sup> ed., 1890, 3<sup>rd</sup> ed., 1895].
  - 20) McWilliam-Tullberg, Rita [1975], *Women at Cambridge A Men's University-though of a Mixed Type*, London(Victor Gollancz LTD).
  - 21) 西岡幹雄 [1988], 「マーシャル経済学の定着過程—『経済学の現状』に対する論評を中心にして—」, 『経済学論叢』, (同志社大学), 第40巻第2号.
  - 22) Skidelsky, Robert [1983], *John Maynard Keynes Hopes Betrayed 1883~1920*, London (Macmillan London Ltd). [宮崎義一監修訳古屋隆訳, 1987.]
  - 23) Report of the Economics and Political Science Syndicate [1903], in *CUR*, Mar. 10.
  - 24) 佐和隆光 [1982], 『経済学とは何だろうか』, 岩波新書.
  - 25) Winstanley, D.A.[1977], *Early Victorian Cambridge*, New York (Arno Press), [1940].
  - 26) ——— [1977], *Later Victorian Cambridge*, New York (Arno press), [1947].
  - 27) 吉岡 斉 [1987], 『科学革命の政治学—科学からみた現代史—』, 中公新書.

---

本稿は、1989年度の関西大学学部共同研究費の援助による成果の一部である。